

# 同朋大学佛教文化研究所報

第 30 号

発行日 平成二十九年三月三十一日  
編集・発行 同朋大学佛教文化研究所

代表者(代) 安藤 弥

〒四五三-八五四〇

名古屋市中村区稲葉地町七の二

TEL (〇五二) 四二一-一三三三

FAX (〇五二) 四二一-一三六九

e-mail: bc-inst@ddho.ac.jp

(題字は池田勇謙元学長)

同朋学園は、住田智見師(一八六八—一九三八)を学祖として位置付けています。住田師の院号は成徳院で、成徳館(一九九二年に竣工した十二階からなる学舎)の名称の由来にもなっています。同朋大学では毎年、住田師の祥月命日である七月一日に、成徳忌・謝徳会が成徳館十二階ホールにおいて執行されます。

かつて住田智見師は真宗大学に奉職され、清沢満之師が一九〇一年に東京に移転開学させた際にも活躍されました。真宗大学は専門学校令(一九〇三年)による認可を受け(一九〇四年)、一九一一年には京都の高倉大学寮と統合され真宗大谷大学となりました。この統合に反対してほぼ総辞職した中に住田師や小職の祖父小島恵見もいましたが、後に請われてまた真宗大谷大学の教授となります。ところが、新たに大学令(一九一八年)が公布され、これによる大学認可を目指し、大谷大学が設立されていく中で(認可は一九二二年)、住田師は大学名から「真宗」が外されてしまうことに象徴される学問的方向性に反対し、辞職して名古屋に帰ります。

その住田師を中心を集った一柳知成師らによって一九二一年、名古屋に真宗専門学校が開かれます。住田師はあえて一教授としてこの「真宗」の名のつく学舎に奉職されます。小島恵見も住田師と行動を共にしました。

住田師の学風は、積尊から親鸞への仏教の展開をふまえながら、あくまで親鸞の眼で仏教を捉えていくものでした。そしてその基礎には史学の重視がありました。住田師は十一歳から十五歳まで漢学を修得しています。その学風に史学的態度が深くみえるのは漢学の影響に相違ないと思われれます。

## 学祖住田智見師の学風と

### 佛教文化研究所

研究顧問 小島 恵昭

調査を蓄積してまいりました。

研究所は二〇一七年に設立四十周年事業を行う予定です。小職は規程により二〇一六年四月より特任教授となったため、所長を退任しましたが、研究顧問の称号を授与されました。この節目に思うところを述べた次第であります。

二〇一六年四月に浅野玄誠教授(前学長)が新たに所長に就任しましたが、十一月十七日ご往生されました。ここに深くお悔やみ申しあげるとともに、ご報告申しあげます。

## 鈴鹿市・寿福院蔵の『教行信証』と『三帖和讃』

小山 正文

一

研究所では去る二〇一六年八月六日、三重県鈴鹿市三日市の真宗高田派寿福院に所蔵される親鸞の二大著作ともいべき『教行信証』六冊、『三帖和讃』三冊の室町時代写本を調査する機会に恵まれた。小稿はその報告書である。調査に当たっては格別のご高配をたまわった同院住職眞岡慶光師、ならびに同行された山田雅教、安藤弥、蒲池勢至、青木馨、藤井由紀子、工藤克洋の各氏に対し深甚の謝意を表したく思う。

さて、寿福院が所在する三日市は、鈴鹿市のほぼ中央に位置し、西方に鈴鹿山脈、東方に伊勢湾を望み、北側には東海道、東側には伊勢能野街道が走る交通の要衝である。したがって早くから人びとが集住し、市も定期的に開かれる殷賑な土地柄であった。そのために衆庶の心の拠としての寺院も自然発生的に成立し、ここには聖徳太子創基の伝承をもつ如来寺、太子寺が建立されている。

両寺ははじめ天台宗を奉じ、恵光・浄林・真藏・清泉・宝樹・実相の寺中六坊が護持に当たったという、その後、真宗高田門徒の流れを汲む親鸞―真仏―顕智―善然(念とも)の法系が、この三日市を中心に真宗念仏を弘通したので、如来寺には顕智の、太子寺には善然(重文)のそれぞれ木造坐像が安置され、七月四日の顕智祥月命日には、「おんない念仏会」も催されるようになり、ついに両寺は六坊もろとも真宗高田派本山第一一世応真(一四九〇―一五三七)の代に本山兼帯所となつて、現今にまで及んでいるのである。

寿福院はその六坊の真藏坊に相当するが、同院と共に法燈を守り続けている良珠院は恵光坊、常超院は浄林坊、撰取院は清泉坊とされるも、

宝樹・実相の二坊は廃されて今は存しない。これらの六坊が護持してきた如来・太子の両寺は、文字通り善光寺如来像、聖徳太子像をそれぞれ堂の本尊に安置して今に至っているわけだが、こうした尊像、両堂、院坊等々のありようこそが、初期真宗寺院の姿を彷彿とさせ、まことに興味深いものがあるといえよう。

二

右記のような歴史的背景を有する寿福院であるが、同院所蔵の『教行信証』と『三帖和讃』という親鸞の代表的著作物も、おのずと高田本山専修寺伝本の系統を引く写本となっている事実は、当然のこととはいえやはり留意しておくべき点であろう。

そこでまず『教行信証』からみていくと、寿福院本は原本の巻立通り教・行・信・証・真仏土・化身土の六分冊よりなる。しかし意外なことに古写本の六分冊本は、建長七(一二五五)年の高田専修寺本、文永十二(一二七五)年の西本願寺本以外あまり存せず、大抵は信と化身土巻を本末に二分した八冊本が圧倒的に多い。寿福院本は分冊形態とあいまいな本文ならびに訓点の表記が、専修寺本と細部に至るまでよく一致する点より、同本の転写本と考定して大過ないものと思われる。

書冊は五穴の袋綴じ本で、縦二三・六cm×横一七・一cmを計る。薄茶色渋引紙表紙へ第一冊を除く各冊に「二一六」の巻数が墨書されている。本文料紙の紙質は楮紙で、その紙数は巻冊順に一〇(墨付八)・四九・六七・二二・二八・七六枚を数える。各冊本文料紙には罫が引かれ、片面八行、一行二〇字内外である。全面にわたって返り点、送り仮名が詳細に施されている以外、注記や朱筆もままみられるが、これらは前記のごとく専修寺本にきわめて近いものとなっている。ただ雁点(レ点)の位置が、専修寺本では漢字間の中央にあるのに対し、寿福院本ではすべて左寄りで、かつその表し方が雁点ではなく完全にレ点化してい

るから、結局のところ前者・専修寺本は一三世紀鎌倉時代中期、後者・寿福院本は一六世紀室町時代後期のそれぞれ写本と断案して可であろう【写真1】。

なお、寿福院本第一冊目の教巻は、他冊と同じ楮紙ながら紙質が新しく、横寸法も一七・四cmで若干大きい上、この冊のみ裏打ちがなされていないことと共に、本文が明らかに他の五冊とは筆致を異にする事実がある。これらの諸点より第一冊教巻は、後世の補写本と認めるべきであろう。これについて、その筆蹟は、専修寺蔵の高田慶長本と仮称される八冊本『教行信証』の行・信本・同末・証・真巻の五冊、および同じく専修寺蔵の仮称高田新出本『教行信証』八冊本（教巻欠のため今は七冊）の信本巻とも同一であることが、すでに指摘されている（重見一行『教行信証の研究―その成立過程の文献学的考察―』（法蔵館、一九八一年 一五〇・三八二・三八八・三八九頁）。

しかしして慶長本の信末・証両巻奥書より、その筆者は慶長五（一六〇〇）年七〇歳であった信楽院慶忍（信楽院慶忍と知られるので、寿福院本教巻の補写年代も推して知るべきである。ちなみに慶忍（一五三一―？）が依った寿福院本の教巻も、これまた専修寺の重文建長本であろうことは、同本の教巻最末に押されている「高田専修寺」の黒印が、そのまま写されているところからも疑いない。

寿福院本について最後に記しておきたいのは、各冊最後尾に同一筆致で「寿福院蔵」の墨書があることと、この六冊を納入する桐箱蓋表に「頭智上人御所持／御本書」の上書がみられる点である。前者は全冊に認められているところより、慶忍による一七世紀江戸時代初頭の第一冊教巻補写後、一世紀半ほどが経過した江戸時代中期頃に教巻を除く残余五冊の総裏打ち修理が実施された際の加筆かも知れない。後者は寺伝の域を出ない箱書であるが、該本が建長七年の高田専修寺本直系の貴重なものである事実をいわんとすると共に、寿福院を含む如来・太子の両寺が、高田門徒の重鎮頭智（一二二六―一二三〇）とも、「おんない念仏

会」などを通し因縁浅からざる関係にあることを伝えている文字と受け取っておきたい。

### 三

さて、次いで寿福院のもうひとつの真宗聖教である『三帖和讃』に目を転じていく。『三帖和讃』とは申すまでもなく親鸞作の（一）『浄土和讃』（二）『浄土高僧和讃』（三）『正像末法和讃』を指すが、親鸞にはこのほかにも聖徳太子関係の大部な（四）『皇太子聖徳奉讃』（五）『大日本国粟散王聖徳太子奉讃』もあって、その首数五〇〇首以上にも達し、和讃史上著名な存在となっている。しかも親鸞の場合右の五部に何度も改訂の手を入れているので、同じ『三帖和讃』でもどの改訂本を組合せるかによって、専修寺系本と本願寺系本のごとく内容的にかなり違ったものが成立する結果となっている。

こうした観点から寿福院本を検するに、一連の和讃である（一）（二）の総奥書が「弥陀和讃高僧和讃都合／二百二十五首／宝治第二代（天長）申歲初月／下旬第一日 釈親鸞七十／見写人者必可唱／南无阿弥陀仏」となっていることと、（二）の最末に漢字の平・上・去・入の四声を示す圈発点が写されていることの二点より、（一）（二）が高田本山専修寺蔵の国宝本に基づき書写されたものと知られる。

一方（三）は如何かといえ、これも「草本云正嘉二歳九月廿四日／親鸞八十／本云正応三年庚九月廿五日／令書写之畢」とその奥書を写すところから、やはり専修寺蔵の正応三（一二九〇）年頭智六五歳書写の重文本（三）を底本にした写本とわかり、寿福院本『三帖和讃』は『教行信証』と同様に由緒正しい高田本山専修寺蔵本によっている貴重な事実が判明するのである【写真2】。

それではこのような寿福院本は、いったい誰によって写されたのだろうか。実はこれには専修寺第一〇代真慧（一二三四―一五一一）〔龍

谷大学仏教文化研究所編『三帖和讃』（同朋舎、二〇〇一年）六六九頁）、同第一二代堯恵（二五二七一―一六〇九）（生桑完明『親鸞聖人撰述の研究』（法藏館、一九七〇年）九三頁、『高田の寺々』（真宗高田派宗務院、一九八〇年）一四九頁）、同第一三代堯真（一五四九―一六一九）（『高田本山の法義と歴史』（同朋舎出版、一九九一年）九八頁、三重県総合博物館編『親鸞 高田本山専修寺の至宝』（三重県総合博物館、二〇一五年）一八二頁）の三説が存し、いずれが正しいのか判断が難しい。

しかし今回の調査で、(一)(二)(三)の各最末中央下部に二・三cm四方の「堯恵」朱角印が押されていることを確認した【写真3】。よってこれが何よりの証左とみて、寿福院本『三帖和讃』の筆者は、今後、堯恵説を採用すべきかと思うものである。

ここで同院本『三帖和讃』の書誌事項を摘録しておく、およそ以下のようになる。

書名の『三帖和讃』は前記した通り(一)『浄土和讃』・(二)『浄土高僧和讃』・(三)『正像末法和讃』の三部を総称した一五世紀室町時代中期以降の呼名である。

著作者は親鸞（一一七三―一二六二）。成立年代は(一)(二)が宝治二（一二四八）年一月二日、親鸞七六歳。(三)が正嘉二（一二五八）年九月二四日、親鸞八六歳。

書冊形態は写本。冊数は三冊。本文は全存。和讃首数は(一)一一六首・(二)一一七首・(三)九二首。外題(一)無・(二)無・(三)無。首題(一)無・(二)無・(三)無。内題(一)無・(二)有・(三)有。尾題(一)有・(二)有・(三)無。装訂は四孔袋綴本。表紙は薄茶色渋引き紙製。見返しは白紙。

書冊寸法は縦二三・四×横一七・五cm。料紙は楮紙。紙数は(一)六九枚・(二)六四枚・(三)四八枚。行字数は半葉四行、一行一〇字内外。

用字は漢字片仮名交り。漢字に振仮名あり。圈発点が朱筆にて打たれている。左訓あり。

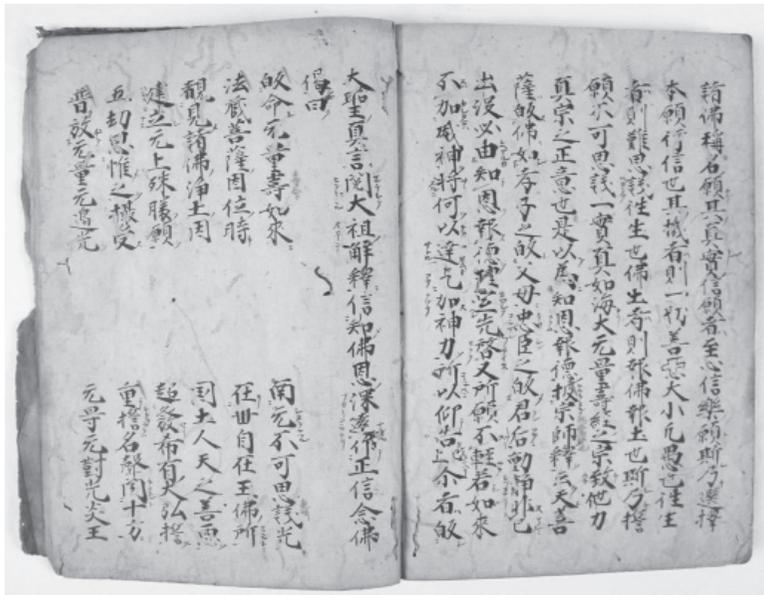
書写者は高田本山専修寺第一二代堯恵（二五二七一―一六〇九）。三帖各冊最末中央下部に二・三cm四方の「堯恵」朱角印が押されている。各冊裏表紙見返しに「寿福院蔵」の江戸時代後期墨書あり。この蔵書墨書は同院本『教行信証』のそれとは別筆。

書写底本は(一)(二)が専修寺蔵親鸞・真仏（一二〇九―一五八）筆の国宝本。(三)が同蔵正応三（一二九〇）年九月二五日顕智六五歳筆の重文本である。寿福院本『三帖和讃』には桐製の納入箱があって、その蓋表に「堯恵上人御真筆／三帖御和讃／伊勢国河曲郡三日市／寿福院什物」と認められている。

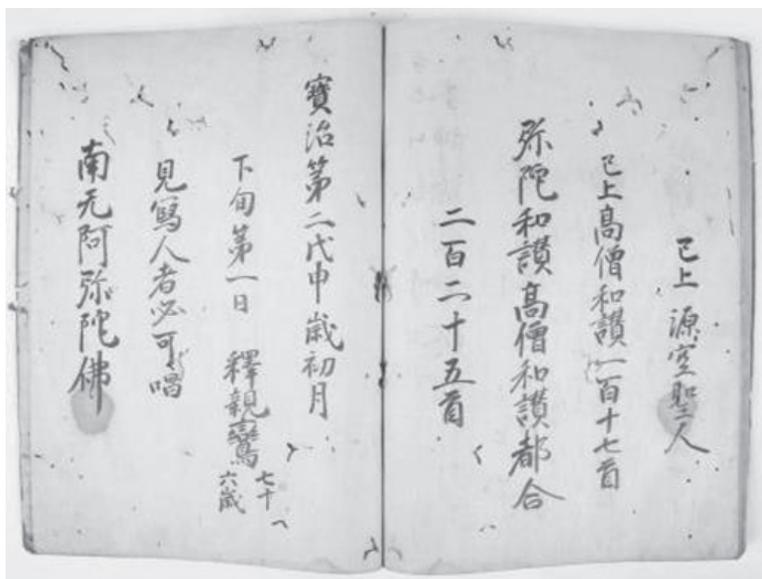
備考として(二)に底本通り国宝本の圈発が写されているが、その位置が国宝本では表紙見返しであるのに対し、寿福院本は「堯恵」印が押される最末尾という相違を指摘しておきたい。これはことによると堯恵の時代まで、国宝本も圈発の位置はそこであったのが、その後の江戸時代の修理時に巻頭へ移動された可能性が考えられるかも知れず、忽諸にできないものがあるといえよう。

以上、寿福院所蔵の『教行信証』、『三帖和讃』を調査しての報告をさせていただいた。両書は共に高田本山専修寺所伝の由緒正しい国宝・重文本を使つての貴重な室町時代後期の写本で、本願寺系のものとは異なる価値高き真宗聖教であることが判明した。両本が今後ますます注目されるようになればと希い擲筆する。

【写真1】  
『教行信証』第二冊行卷  
正信念仏偈 卷頭部分



【写真2】  
『三帖和讃』第二帖  
浄土高僧和讃 奥書部分



【写真3】  
『三帖和讃』第一帖  
浄土和讃より  
高田専修寺第十二代堯慧  
(一五二七—一六〇九) 印



## 情報公開プロジェクトについて

大畑 啓

工藤 克洋

中川 剛

日比野洋文

藤井由紀子

昨今、学術研究に関わる研究者や研究機関には、文理を問わず、調査研究の成果をデジタル化して情報公開することが求められている。このような学界の動向に鑑みて、研究所では、すでに前々号と前号で報告したように、これまでの研究活動の蓄積を内外に発信することを目的とした、「アーカイブス閲覧」の設計と公開に関わる作業を進めてきた。また、国立情報学研究所が提供している学術機関リポジトリを通して、研究所発行の紀要・所報・図録等を公開する準備も行ってきた。そこで、これらの情報公開を目的とした作業チームを「情報公開プロジェクトチーム」として立ち上げることにした。本報告では、その作業内容と今後の課題・展望を示す。

## アーカイブス閲覧

前々号で紹介したアーカイブの構成のうち、これまでは、とくに史料データの作業に重点を置いて進めてきた。一昨年度は、過去に収集してきた寺院調査データの整理とデジタル化を行い、公開フォーマットの基本設計も構築した。昨年度は、本学園所蔵品の法隆寺一切経十九点のデジタル化を行い、後期ギャラリー展示と連繋させ、充実したデータベースを作成した。

そして本年度は、九月に実施した真宗大谷派吉崎別院における史料調査で収集したデータに着手した。幸い、所蔵者から情報公開について許可を得ることができ、調査記録と撮影画像をもとに、約五十点の史料の

データ入力作業を行った。今のところ、史料ごとに書誌情報と画像を合わせた一体型の形にはできたものの、寺院データ（年表など）や他史料とのリンク付けが未完成で、今後も追加・修正していくが、データベース活用の便に資する上で重要な工夫も、新たに分かってきた。

吉崎別院は、真宗史上重要な位置を占めるが、風土的にも重要な歴史的背景をもっており、寺院ゆかりの伝承やそれに付随する文化財から、別院創立前史を含めた、地域の歴史的特色を発信することも可能である。すると、寺院データに所蔵品一覧を表示する際、単純に法宝物・文書という分類や時代順にするだけでなく、時代や地理的・風土的特色、真宗史上の重要度、地域伝承との関係など、あらゆる観点から区分けて一覧化できれば、より充実したデータベースになると思われる。これにより、文化財の型・種類・年代・地域ごとに、他寺院所蔵品との間で比較しやすくなる。そのため、研究所の寺院調査による収集データを無秩序に公開するのではなく、調査した史料とそこから見えてくる多彩な歴史的価値を一般にも広く共有できるように、データ整理やリンク付けを考えて設計していくことが望ましいと思われる。

今後は、本年度後期のギャラリー展示で陳列した、西巖寺所蔵品（小川貫式資料）のデジタル化にも着手する予定である。法隆寺一切経と同様に、展示情報と連携させ、近代史ならではのデータベース作成を目指している。

なお、前々号でも報告したが、研究所の過去の収集データは、デジタル化や情報公開が想定されていなかったため、撮影コンディションや画像解像度などに問題があるものが多数存在する。そのため、研究所の機材や設備を改善し、デジタル公開を前提とした調査方法へ移行していくことは必須である。ただ、過去のデータを含め、すべてを統一したデータベースのフォーマットで公開することは困難である。さらにいえば、法隆寺一切経のような歴史的価値が比較的高いものと、それほど希少でない法宝物などを、同一の形式で公開すべきかどうか判断が難

しい。したがって、ある程度の統一性は持たせつつ、画像の精度や史料データの質などに合わせた形式を設計することも、一つの方法として検討していく必要があると考えている。

#### 機関リポジトリ

研究所では昨年度、学術機関リポジトリポータル・ジャイロ（以下、機関リポジトリと略す）を通して、研究所刊行物『佛教文化研究所紀要』の全号（当時三十四号まで刊行）を公開するという計画が持ち上がった。電子媒体での学術雑誌の公開は、同朋大学における組織の中でもあり、最初であった。そのため、経験、前例がない計画であったこともあり、いくつかの問題に直面し、それを解決しての公開となった。

まず、紀要全号を公開するにあたって、掲載されたすべての記事の執筆者（著作権者）から、公開に伴う許諾を得る必要があった。これには、執筆者に許諾書を郵送し、回答を得るという方法を探った。なお、このとき回答を期日までに得られないことも予想されるため、許諾書には、執筆者から回答がない場合、公開に伴う黙示の許諾を得たものと見なす旨を併せて記載した。

さらに、こうした確認をせねばならない権利上の問題は、記事に添付された写真資料にもあった。紀要には、執筆者本人ではなく、第三者の所有物を記録した写真が資料として添付された記事が少なくない。こうした記事を、機関リポジトリを通して公開した場合に、研究所ないし執筆者と第三者との間で、権利上の問題が生じることが懸念された。例えば、撮影時に執筆者と、被写体となる物品を所有する第三者との間で、「写真を紀要〇号の誌面以外に使わないことを条件に撮影を許可する」というような契約・約束が交わされていたとする。その写真が資料として添付された記事を、新たに機関リポジトリに公開することは、撮影した執筆者から公開における許諾を得ていたとしても（写真の著作権は撮影者にある）、第三者との間で結んだ契約では、違反に当たると恐れがあ

る。したがって、記事に添付されたすべての写真資料における権利等を精査するには時間を要することもあって、まずは近年の使用に差し支えない写真資料のみ記事に添付したまま公開することにした。それより過去の当該記事については、ひとまず写真資料を一律削除し、権利を確認した後、差し支えないものについては順次公開を予定している。

こうして、右に取りあげた以外にもいくつかの問題を解決し、本年度に機関リポジトリを開設、紀要の公開に至った。今後の課題としては、機関リポジトリの機動的な更新と、継続した運用である。研究所が機関リポジトリを開設するにあたり、参考までに他大学の機関リポジトリ運用状況をいくつか確認した。すると、すでに紙媒体では刊行されているはずの学術雑誌の最新号が、機関リポジトリでは公開が遅れているという状況や、なかには更新が停止している状況が見られた。もちろん、機関によっては発刊の一年後に公開としている場合もあるが、研究成果の公開は公共の利益に繋がるべきものであるため、機関リポジトリを開設・運用するならば、その管理者は紙媒体も電子媒体も等しく扱うことが望ましいともいえる。当研究所においても、機関リポジトリを機動的・継続的に運用していくことが重要な課題であり、ひいてはそれが機関としての価値を高めていくことにも繋がるであろう。

研究所におけるデジタル化と情報公開は、関係者各位から一定の理解を得ていると考えている。しかし、何分作業が煩瑣であり、かつ緻密性が要求される業務であるため、研究所でこれをスムーズかつ精緻に行うには、人員や経費の面で限界がある。それでも、研究所ではこれまで孜孜として進めてきており、今後は、若手研究者や学生に基礎作業を委託するなどして、研究所の活動に関わる機会を提供しつつ、先のような問題を少しでも改善していく必要性を感じている。これらも含め、研究所独自の魅力的な情報公開の実現のために、これからもできるだけ多くの関係者から、ご支援をたまわりたいと思う。

## 《研究会活動報告》

## アジア仏教研究会

武田 龍

開催日 4/18、6/20、7/25、9/30、10/24、

12/19、1/23、2/21、3/15

参加者 玉井威・武田龍・宮崎保光・蒲池勢至・岩瀬真寿美・中川剛  
マックス

仏教における最高究極の価値を明らかにすることを目的とするアジア  
仏教研究会は、『法華経』（岩波文庫）の読解を継続し、今年度は「授記  
品」まで読み進んだ。

法華経は、譬喩品で三車火宅の譬えを説いてすぐれた方便を示し、信  
解品では長者窮子の譬えで如来の知の蔵 (tathagata-jñāna-kosa) の相續  
を一仏乗と説く。

譬喩品では釈尊が舍利弗の成仏を予言する。それを聞いて驚いたのが  
同じ法座にいた摩訶迦葉、須菩提、大迦旃延、大目犍連である。我らに  
も授記をと懇願するのが信解品である。授記 (vyākaraṇa) とは、成仏  
の予言であり、約束であり、保証である。授記品では彼らへの授記が説  
かれる。

舍利弗をはじめとするこの五人は、声聞比丘を代表する長老たちであ  
る。声聞 (śrāvaka) とは本来は「釈尊の譬喩に接した人」の意であり、  
やがて「釈尊から直接に教えを受けた人」の意となり、原始仏典では仏  
教草創期の直弟子を指す言葉となった。しかし法華経では、部派の教学  
への対抗からか、直弟子の驕りと慢心を感じさせないように使用される。  
直弟子中の有力者として知られる彼らが、世尊の間近で面と向かって  
(bhagavato 'nikāi sammukham) 教えを聞いていながら、怠惰ゆえに教え

の核心を聞き逃したと懺悔し、授記を乞う。出家修行の仏道を貶めるよ  
うな設定である。

五人への授記の内容はほぼ同じである。多くの仏たちの許で修行  
し、気の遠くなるような時間が過ぎた後で出現する国土に生まれる。  
その国土 (kṣetra) は、清らか (suddha) で平坦 (sama) で喜びに満ち  
(ramaṇya) 素晴らしく (pṛasādika) 見た目に美しい (darśanīya) と描  
写され、そこへは「生まれる」(upapadya) とされる。これは無量寿経  
(Sukhāvī-vyūha) の仏国土のありさまの描写と重なる。

## 真宗史研究会

安藤 弥

二〇一六年度は次のとおり、二回の研究会を実施した。

## 第一回目 (通算第三四回)

【日時】七月七日 (木) 一六時三〇分～一八時

【報告者】老泉量氏 (大谷大学大学院博士後期課程)

【題目】「戦国期美濃本願寺教団の特質―揖斐川流域教団の形成―」

## 第二回目 (通算第三五回)

【日時】十二月二十二日 (木) 一六時三〇分～一八時

【報告者】木越祐馨氏 (加能地域史研究会代表)

【題目】「新出の清沢満之宛書簡群の紹介」

老泉氏は、戦国期の美濃地域における本願寺教団の展開について、と  
くに法宝物裏書分析から検討され、木越氏は、明治二六～三十五年  
の清沢満之宛書簡十三通等の貴重な史料を紹介された (『同朋大学仏教  
文化研究所紀要』第三十六号掲載)。

次年度も引き続き二回程度の研究会活動を予定している。

## 東アジア仏教思想史研究会

藤村 潔

日時 4/26、5/20、7/22、10/21、11/4、

12/15、1/26、2/16

参加者 玉井威、藤村潔、中川剛、高木祐紀、花菜、廣田万里子

本研究会では、鎌倉後期に活躍した華嚴宗の示観房凝然（一二四〇—一二三二）の文献を中心に研究している、主に『大日本仏教全書』に収録される『八宗綱要』二卷（二十九歳）の原典資料を定本に読解している。また、必要に応じて、同じく凝然の『三國仏法伝通縁起』三卷（七十二歳）、同時代の存覚『歩船鈔』二卷の資料を参照している。

昨年度は『八宗綱要』の総論及び八宗の中の俱舍宗まで読了したが、二〇一六年度では、成実宗と律宗の項目の途中まで読み終えることができた。『八宗綱要』の中で凝然が一番紙面を割いている節が律宗に他ならない。そのため、研究会を通じて、凝然の戒律に対する関心の高さを知ることができた。末法到来という鎌倉期の中で易行である専修思想が広く浸透した。その中で凝然はあくまで戒律復興を貫き、特に中国唐代の南山律師道宣（五九六—六六七）の四分律に傾倒し、小乗と大乘の共通（ぐづう）を図っている。つまり、律の教えは小乗であっても、その義は大乘に通ずるといった解釈方法である。そのため、彼は大乘の精神に則っているが、ただ聖者の姿勢としては、具足戒の比丘二五〇戒、比丘尼三四八戒を遵守すべきと主張する。その他に凝然は『律宗綱要』（六十七歳）や『三國仏法伝通縁起』などにも戒律の通史や三聚淨戒の在り方を詳細に論じている。

次年度では、『八宗綱要』と諸種の文献を比較しつつ、凝然が年齢を重ねるにつれて戒律観がどのように変化していくか検討し、律宗の思想全体を読了する予定である。

## 「日本仏教の成立と展開」研究会

脊古 真哉

「日本仏教の成立と展開」研究会（小島恵昭・大山誠一・黒田龍二・脊古真哉・吉田一彦）では、各研究参加者の研究領域・関心を基礎に、幅広く日本仏教・日本宗教に関わる問題を取り上げてきている。二〇一六年度には、二〇一六年七月九日および一二月一七日に研究会を、二〇一七年一月七日・八日の両日に現地踏査を実施した。

七月の研究会では、吉田氏の「お水取りの密教的要素―芸能始源をめぐって―」、一二月の研究会では脊古の「ガラン神考―顕密仏教の伽藍神から民俗宗教のガラン神へ―」の報告が行なわれた。研究参加者だけではなく、外部からの参加をも得て活発な議論を展開することができた。

現地踏査は静岡県中部地域を対象とし、一月七日の午後には法田山尊永寺（袋井市）の修正会（田遊祭）、夜間には千葉山智満寺（島田市）の修正会（鬼払い）の調査を実施した。また、七日・八日に事任八幡宮（掛川市）、駿河国志太郡衙（郡家）跡・志太郡衙資料館（藤枝市）、東光寺（島田市）、鶴田寺（島田市）、掛川城跡（掛川市）の二の丸御殿・復原天守を踏査・見学した。

今回の法田山尊永寺と千葉山智満寺の修正会の調査は、二〇一二年度の兵庫県加古川市の鶴林寺および加西市の東光寺の修正会、一三年の奈良県桜井市の大神神社の御田祭、一四年の東大寺の修二会、一五年の和歌山県伊都郡かつらぎ町の大日堂の修正会・御田、一六年の京都府木津川市の涌出宮の居籠祭に続く新春行事の調査であった。今後とも新春行事の調査を継続し、研究参加者のこれまでの他の調査の成果も加えて、近く仏教文化研究所の展示事業で新春行事をテーマとした展示を実施したいと考えている。

## 教行信証学習会

吉田 暁正

講師 張偉 先生

趣旨 漢文として『教行信証』を読む

会場 同朋学園D・プラザ閣蔵2F 多目的会議室

テキスト 東本願寺刊『真宗聖典』（必要に応じて資料配付有）

開催日 5/26、6/23、7/28、9/29、10/27、

11/24、1/26、3/23

今年度も、『教行信証』「化身土巻」における善導の『観経疏』の引文を読み解きつつ、学習を進めている。

善導は「散善義」で「また真実に二種あり。一つには自利真実、二つには利他真実なり。」（『真宗聖典』334頁）とし、「自利真実」に二種ありと解釈を加えているが、「利他真実」については何も語っていない。なぜ、空白となっているのか。そこには、あえて空白にすることで、解釈を押し付けるのではなく、問いかけることが意図されている。

その背景には、『正信偈』に「善導独明仏正意」と著されるように、善導は、『観経』において観仏と念仏とが、両方とも宗であると見ていた。仏説として説かれた『観経』は、意味、形としては観仏を勧めながら、法音、響きとして念仏を説いている。念仏は、人間のはからいを超えて、人間を包んでいくはたらきである。意味を伝えることと、意味を超えたはたらきを伝えることによって、あらゆる衆生を撰取する如来の本願の力を、仏説として善導が顕らかにしたと親鸞は見ていたのではない。

親鸞は『愚禿鈔』で、「利他真実について、また二種あり」（『真宗聖典』436頁）と顕らかにしている。そして、自利真実は、堅超、堅出、利他真実は、横超、横出として、二雙四重によって、二種の真実に

対する了解を著している。自力修行、定散二善もまた、自力であっても軽視してはならない道である。自力をも包んで、真実の中に撰取していく。そこに横超として、如来の誓願、他力が、すべてを包むはたらきとして確かめられる。

## 仏教教育研究会

北島 知量

この研究会は、会員が仏教教育関係の論文を発表し、参加者と質疑応答する形で進めてきた。本年度の開催は次のとおりである。

5/26・7/21 発表者 藤原智之

12/3 全員が仏教教育学会大会（於愛知学院大学）に参加

12/23 発表者 岩瀬真寿美

「道元の仏性論に基づくいのちの教育」

2/26 発表者 北島知量「仏教教育原理考」

なお、岩瀬・北島の発表内容は論文として日本仏教教育学会編『仏教的世界の教育論理』（法藏館、二〇一六年十二月三日刊行）に収録。

### 《研究所新収史料について》

#### ① 『黄檗版一切経』一括

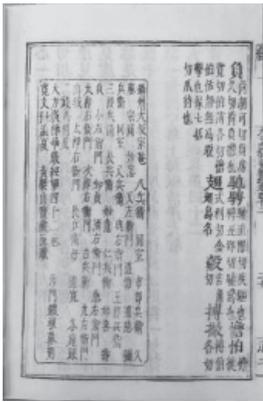
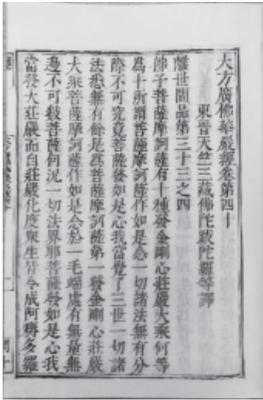
愛知県額田郡幸田町の真宗大谷派正樂寺様より御寄贈を受けた。同寺御住職天野信行氏ならびに関係各位に深く感謝申しあげる。

『黄檗版一切経』は、鉄眼版とも言われ、江戸時代に版木が制作さ

れた版本大蔵経（一切経＝佛教經典の総称）である。黄檗宗の禅僧である鉄眼道光（一六三〇―一八二二）が発願し、勸進活動を行い、明の万曆版を覆刻開版して延宝六（一六七八）年に完成させたもので、六九五六卷（統藏経二六卷を含む）からなる（『国史大辞典』）。その版本は萬福寺（京都府宇治市）の宝蔵院に収められ、求めに応じて摺られ続けた。江戸時代後期に各地の寺院がこの黄檗版を経蔵に収める事例がよく知られる。正樂寺にこの黄檗版がもたらされたのは天保年間、同寺二十二代住道の時代とみられる。住道は本山東本願寺の高倉学寮に学んだ学僧であった。版本を取める木箱（経箱）の底に天保九（一八三八）年といった年号や大工（又蔵ら）、経箱の寄進人（新城の浜田屋市蔵ら）の名前などが確認される。寺伝によれば弘化四（一八四七）年に経蔵が完成したという。前年に東本願寺学寮講師雲華院大舎が来寺して『大無量寿経』を講義したとも伝えるから、それが経蔵建立の機運を高めたのであろう。この正樂寺蔵本は全巻揃いとみられ、各冊の状態が非常に良好である点でも貴重である。真宗寺院における経蔵・黄檗版一切経」伝来の一事例として、またさらに大きな位置付けを考えていきたい。

詳細な調査結果の報告については後日を期したいが、貴重な実物資料として学生の学びに資したり、展示に用いたりしながら、研究所において大切に保管・活用をし続けていきたいと考える次第である。

『写真上・下』 大方広仏華嚴経卷四十（冒頭・末尾）（『黄檗版一切経』）



## ②宣如判『五帖御文』五冊

版本・冊子装（縦二六・九cm×横二二・〇cm）

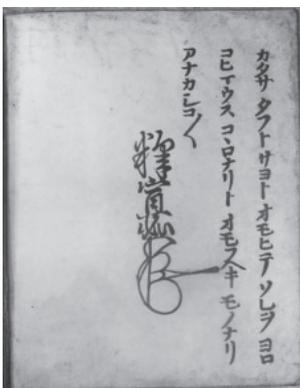
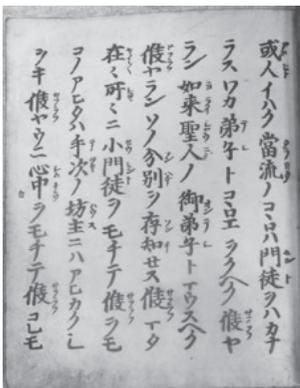
小島恵昭研究顧問より御寄贈を受けた。深く感謝申しあげる。

『御文』とは、戦国時代に本願寺蓮如（一四一五―一九九）が浄土真宗の教えをわかりやすい表現で説きあらわした消息形式の仮名法語である。二〇〇通以上あるといわれるが、その中から五帖八〇通にまとめられたのが『五帖御文』であり、現在も本願寺教団において用いられている。

『五帖御文』が五冊そろった古本の現存事例としては、まず最古本である実如判写本が知られ、ついで証如判刊本があり、さらに顕如判、教如判と中世・戦国期の事例が少数ながら見出される。

本品は、東本願寺第十三代宣如（一六〇二?―一五八）の署判を各帖末尾に据え、格調高く調えた優品である。各冊に挟み込まれた紙片から五冊そろいであることが確認でき、調製されたのが「午六月」で、「月番」として「下間治部卿」と「石井隼人」の名が記されているが、年次確定には至らない。とはいえ、宣如判『五帖御文』の現存例は実はほとんどなく、江戸時代初期の真宗聖教として、とても貴重なものである。

『写真上』『五帖御文』第一帖冒頭 『写真下』『五帖御文』第五帖末尾



二〇一六年度彙報

《研究所構成メンバー》

所長 浅野玄誠（十一月十七日逝去）

所員 ブレニナ・ユリア（人文学科） 木野美恵子（社会福祉学科） 石牧良浩（社会福祉学科）

所員・幹事 安藤弥（仏教学科）

研究顧問 小山正文 小島恵昭 玉井威

所員（非常勤） 大艸啓（十月～） 日比野洋文（～八月）

藤井由紀子

客員所員 青木馨 岩瀬真寿美 大山誠一 岡村喜史 蒲池勢至

北畠知量 ギャナ・ラタナ 工藤克洋 黒田龍一

嘉木揚凱朝 脊古真哉 武田龍 服部仁 藤村潔

松金直美 吉田暁正 吉田一彦

客員研究員 飯田真宏 市野智行 花栄 川村伸寛 高木祐紀

中川剛 新野和暢 松山大

特別研究員 日比野洋文（十月～）

《所員会議》

4 / 12、5 / 10、6 / 7、7 / 12、9 / 20、10 / 11、11 / 10、

12 / 20、1 / 19、2 / 8

《公開講座等》

・現地で学ぶセミナー

第1回 7 / 23 「講師」脊古真哉

「平野神社・広隆寺・松尾大社―長岡京と平安京のはざま―」

第2回 10 / 26 「講師」藤井由紀子

「諏訪大社の「失われた神宮寺」を訪ねる」

《ギャラリー史料展示》

・前期（7 / 15～7 / 22）「担当」安藤弥

「聖教はよみやぶれ―来て見て触って真宗文化―」

・後期（12 / 13～12 / 22）「担当」藤井由紀子

「戦時下の中国仏教研究

―西厳寺蔵「小川貫式資料」と山西省調査記録―」

《史料調査活動》

・真宗寺院史料調査

6 / 26 西厳寺（浄土真宗本願寺派・岐阜県各務原市）

7 / 15 西厳寺（浄土真宗本願寺派・岐阜県各務原市）

7 / 28 徳永寺（真宗大谷派・岐阜県海津市）

9 / 1 浄厳寺（真宗大谷派・岐阜県海津市）

9 / 2 真宗大谷派吉崎別院（福井県あわら市）

9 / 8 旧七条村道場（滋賀県長浜市）

9 / 26 西厳寺（浄土真宗本願寺派・岐阜県各務原市）

11 / 16 西厳寺（浄土真宗本願寺派・岐阜県各務原市）

12 / 2 西厳寺（浄土真宗本願寺派・岐阜県各務原市）

2 / 28～3 / 1

浄厳寺（真宗大谷派・岐阜県海津市）

・その他（随時、持ち込み、問い合わせのある史資料の基礎検討など）

\* 巻頭言にも示されているように本年度、所長が交替しましたが、新任の浅野所長が急逝したため、それ以降は学長の指導のもと、幹事が所長職務を代行するかたちをとりました。ここに「ご報告申し上げます。」